

2. スポーツ、移民、エスニシティ

ーオーストラリアの研究動向からー

尾崎 正峰

はじめに

グローバリゼーションの特徴を表現するとき、「ボーダーレス」、あるいは「国家の枠を超えた移動」などの語句がよく用いられるが、「人の移動」はその中でも重要な現象の一つにあげられよう。ただし、「人の移動」と一口に言っても、その実態は多様である。たとえば、多国籍企業の一員として経済活動の展開に従事する人々が全世界を転々とするケースがある一方で、（理由はさまざまであるにせよ）生誕・生育の地を離れ、国境を越えて他の国・地域での生活を余儀なくされる移民の事例もある(1)。

本稿では移民を想定して論じていくが、その現代的な特徴について、カースルズとミラー(1996)によれば、「国際移民は20世紀後半の産物ではない。また、資本主義と植民地主義によって代表される近代化の発明品でさえもない。移民は古代から人間史の一部を構成してきた。しかしながら、国際的な移民は、1945年以来、そして1980年代の中頃以来とくに質量ともに増大してきた」(2)とされる。

移民が進展することによって、一つの空間（その典型的なものが国家となろう）にさまざまな民族が混在することが産み出される。そのことへの対応については、「同化（政策）」や「文化多元主義」など、多様な対応のあり方が歴史的に示されてきた。その中で、異なる文化的背景を持つさまざまな民族の独自性を認めようとするベクトルをもつものとしての「多文化主義」が注目されてきたといえることができる。

オーストラリアは、カナダ、アメリカなどとともに、上記の現象に関して典型的な事例といえよう。とくに、オーストラリアは、第二次世界大戦後の移民の急激な拡大と「多様化」によって、い

わゆる「白豪主義」から「多文化主義」へと大きく舵を切ることになった経験を持っている。

では、その歴史的な過程にあって、スポーツはいかなる変化を来したのであろうか。移民はスポーツに対していかなる影響を及ぼしたのであろうか。これらの点について、これまで日本においてはほとんど論じられてこなかったものと思われる。人々の生活レベルや生活実感に近い領域であるスポーツ、その変化を文化変容の重要なファクターとしてとらえていくことで、オーストラリアの社会の変容の全体像をより精緻に描くことができるであろう。

1. オーストラリアと移民 (3)

ヨーロッパによるオーストラリアの「発見」、そして、1788年1月18日、アーサー・フィリップ総督が約750人の囚人を含むおよそ1000人の入植者とともにシドニーのボタニー湾に到着以後のイギリスによる植民地支配の時代は、イギリス文化中心、言い換えればオーストラリアは、“monocultural”な社会であるとする意識が強固であったといえよう(4)。

1850年代、ゴールドラッシュの時代、フランス、イタリア、ドイツ、ポーランド、ハンガリー、アメリカ、中国など世界の国・地域から、一攫千金を夢見た人々がオーストラリア大陸へと渡ってきた。とくに、植民地政府の統制下になかった短期間の中国人の大量流入は顕著であった。このことは、「異文化」に対する嫌悪感、定住しない「出稼ぎ型」への違和感、「富」の流出への懸念などを重層的に引き起こした。こうした意識は、アングロ・サクソン文化への脅威、人種差別へと派生、合流することになり、1880年代以降、移住制限へつながり、いわゆる「白豪主義」の形成をうながすこ

とになった。そして、1901年の連邦成立、同年「移民制限法」成立によって、有色人全体の移住制限と排斥が国是となった。

「白豪主義」は、国家政策の中で第二次世界大戦中においても継続していた(5)。その変化の嚆矢は、1947年の労働党政府による大量移民計画にもとめられよう。戦後復興とオーストラリア経済の自立化を目的として、大陸防衛と内陸開発のための人口増加策、経済復興の基盤としての工業化のために必要な労働力の供給策、国内市場拡大策など具体的な射程が設定された。この計画では英語系ヨーロッパ人の移民を想定していたが、現実には、ヨーロッパ地域の戦後復興が進みオーストラリア移住への求心力が低下したこともあり、英語系移民の確保が困難となった。その結果、南ヨーロッパ地域（イタリア、マルタ、ギリシャ、ユーゴスラビア等）からの移民が増大した。その後、人道主義的立場からの難民（戦争、内戦、革命等）の受け入れもあり、さらなる地域、民族の拡大がもたらされた。この過程において「白豪主義」は融解し始めたといえる。

このような移民の「多様化」によって、1960年代中頃から「白豪主義」の「終焉」は実態化していたといえるが、1973年、移民大臣アル・グラスビーによる「多文化主義」の提唱によって公式のものとなった。その後、1978年には有名な「ガルバリー報告書」が公表されるなど、（その是非をめぐる多くの議論があったが）「多文化主義」はオーストラリアの国と社会を語る際のひとつのキーワードとなった。

2. 移民とスポーツ

～オーストラリアにおける研究動向

スポーツ研究の領域に目を移してみれば、「移民とスポーツ」をテーマとする研究は、移民がオーストラリアの社会に与えたインパクトの大きさに比して遅いスタートであったが、徐々に成果が蓄積されつつある(6)。

以下では、オーストラリアにおける「移民とスポーツ」をテーマとする研究動向のなかからいく

つかの論点を紹介していく。

（１）「不平等」と社会的背景

オーストラリアにおいては「公平・平等」神話（あるいは、社会通念）ともいうべきものの存在がある。スポーツに関しても同様である。

しかし、そうした観念とは別に、スポーツにおける「不平等」の実態はさまざまなレベルで存在している。こうした「する」スポーツへの参加状況の格差実態に対して、その要因を歴史社会的に探ろうとする研究がある（McKay (1986)、McKay (1991)、McKay, Hughson, Lawrence & Rowe (2000)など）。ここでは、女性、高齢者、障害者などと同時に、非英語圏出身の人々（Non-English Speaking Background=NESB）の参加率の相対的な低さを問題として、その社会的背景を、就学、雇用、職業などの指標をもとに検証している。また、NESB(7)の女性たちは二重のハンディを負っている点などの調査研究も明らかにされている（Taylor & Toohe (1998)など）。

（２）移民が織りなす多彩なスポーツ

さまざまな国・地域からの移民によって、オーストラリアでは各民族を基盤とした独特なスポーツの展開をしており、他の地域では見られないほど豊かな多様性が描かれている。アイルランド（ゲーリック・フットボール）、スコットランド（ハイランド・ゲーム）、ドイツ（トリム）、南太平洋諸島（サーフィン）の他、スカンジナビアの国々、ギリシャ、セルビア、クロアチア、そして、ベトナム、中国などの国・地域について、ethnicをキーワードとして、スポーツ史の研究の中で、各民族、各種目の歴史社会的な展開の様子が描き出されている（Adair & Vamplew (1997), Booth & Tatz (2000), Cashman (1995), Mosely, Cashman, O'Hara & Weatherburn (ed.) (1997), Vamplew & Stoddart (1994)、など）。

（３）エスニック・マイノリティと

スポーツクラブ

オーストラリア社会の中での移民は、Anglo-Australian が主流のホスト社会にあってはエスニック・マイノリティとして位置づけられる。そうした状況の中で、エスニック・コミュニティを形成し、内部での結びつきを強めることで、自己防衛、相互扶助、そして、伝統文化、生活様式の維持（次世代への継承）をはかることは必要な対応であった。

「オーストラリアでは、ギリシャ人やイタリア人、その他のエスニック・コミュニティが大がかりなスポーツやリ克雷ーション・クラブなどの社会的アソシエーションをつくり、各々の集団のためだけのミーティング場所を提供している。これらはしばしば、文化的・政治的機能も十分果たすのである」(8)という指摘に見るように、移民にとってスポーツクラブは重要な意味を持っていた。とくに、サッカーの盛んなイタリア、ギリシャ、マケドニア、ユーゴスラビアなどからの人々によってサッカー・クラブがオーストラリアの各所で設立された。このことは、次項で述べるオーストラリアにおけるサッカーの「特殊な」位置づけを産み出す一因ともなっている。

(4) 「エスニック・ゲーム」としてのサッカー
オーストラリアで Football といえば、まずオージー・ルールズのことであり、次にラグビー・リーグ、ラグビー・ユニオンとなり、サッカーは他の Football Code の後塵を拝している。サッカーといえば世界でもっともポピュラーなスポーツであるにもかかわらず、である。こうしたサッカーの「特殊な」位置づけの特殊性を産み出す歴史社会的な考察が蓄積されてきている（ごく初期のものとして、Harrison (1979)。その後の成果として、Mosely (1994)、Mosely (1995)や Hughson (1992)、Hughson (1998)、O'Hara(ed.) (1994)など）。

それらの研究では、第一に、第二次大戦前はイギリスからの移民（とくに、Scottish）が主流であったが、前述のように、第二次大戦後の移民の大量化、「多様化」によるエスニック（コミュニテ

ィ）ごとのスポーツ（サッカー）クラブの設立とその増加にともなって、イギリス系の影響力の低下が顕著となり、サッカーが「エスニック・ゲーム」としてとらえられるようになった経緯が明らかにされてきている。

第二に、サッカーの試合における「暴力」、とくに、観客が引き起こす騒動(9)をめぐる報道（とくに、1960年代まで）の位置づけに関する検討である。「暴力」の社会的背景として、移民の低い社会的位置（労働（職種）、低賃金、生活環境（住居）、社会保障、等）、移民に対する社会意識（あざけり、侮蔑、卑語、等）、また、「白豪主義」時代の同化（assimilation）圧力によって自らの文化の維持が困難となることへの危機意識などの鬱積があり、そのフラストレーションの発散の場としてとらえていたとされる(10)。逆に、社会の「主流」にとっては、アングロ・サクソン（文化）を基盤とする生活水準、生活様式、社会の統一などに対する不安などの意識があり、マスコミ報道には移民（集団）への差別意識（「まなざし」）が投影しているということができよう(11)。

第三に、サッカーの「脱エスニック化（de-ethnicisation）」である。サッカー・クラブは、エスニック・コミュニティの象徴として位置づいているが、そのことが逆に活動の拡がりを阻害しているという経営的な評価は長らく存在していた。1977年、Australian Soccer Federation（ASF）会長（President）が「1980年までにサッカー・クラブはエスニック名をはずす」ことをプレス発表するなど、1970年代後半以降、チーム名からエスニック関連の語句をはずし、地域（district）を名称に掲げる方針などが断続的に試みられてきた。しかし、クラブの存立基盤としてのエスニック・コミュニティやサポーターとの関係などで、その帰趨は流動的な状態にあるといえる(12)。

おわりに

多文化主義がもたらした成果と同時に、その問題（限界）が指摘されてから久しい。たとえば、関根(1994)は、多文化主義のパラドックスとして

「多・文化主義」「多分化主義」の用語を用いて、①文化や多元性の定義の曖昧さ、②文化の多様性とナショナリズム、③エスニック・マイノリティへの公的財政援助とホスト社会の反感、④ナショナル・アイデンティティ動揺への不安と不満、⑤希少資源をめぐるエスニック集団間の対立、⑥エスニック・ポリティックスと多文化主義、の点を掲げている(13)。こうした指摘は、オーストラリアの社会を揺るがしたポーリン・ハンソンとワン・ネーション党の勃興（と衰退）のように（ネオ）ナショナリズムとの相克とも深く関係している。

今後は、これまでに述べてきたようなオーストラリア社会の全体状況をふまえ、スポーツを「脱エスニック化」と「エスノセントリズム」の両極の間を揺れ動くものとしてとらえ、オーストラリアにおける移民、エスニシティとスポーツの歴史社会的な展開過程を整理し、発展させていきたい。

【注】

(1)ここであげたふたつのケースでは、「移動地での定住、定着」の意図の度合いにおいても違いが見られる。

グローバリゼーションの展開の中で「世界を駆けめぐるエリート」のようなケースをスポーツの領域にあてはめると、トップ・アスリートたちの「移籍」があげられるであろう。国籍を問わず「国際舞台」を転々とする選手たち。そのプレイ姿に多くの人々の耳目が惹きつけられているが、ひとたび「移籍」の背景に目を向けてみるならば、「ボスマン判決」などに象徴されるように、国家の枠組みと「労働」の移動、そこに見る規制と「移動の自由」という問題が顕在化していることに気づかざるを得ない。まさに、(スポーツの)グローバリゼーションの展開にともなって現出してきた現象ということができよう。

(2)カースルズ、ミラー(1996)、p.4。なお、カースルズらの議論（とくに「移住過程」）についての現段階の評価は、梶田、丹野、樋口(2005)、など参照。

(3)ここでの叙述は後掲の参考文献による。とくに、藤川隆男編(2004)、アル・グラスビー(2002)、ガッサン・ハージ(2003)、関根政美(1989)、関根政美(2000)、シェリントン(1985)、竹田いさみ、森健編(1998)。

(4)しかし、現実には、先住民族であるアボリジナルの人々の存在があった。

アボリジナルの人々と(近代)スポーツとの最初の関わりは、植民地時代、キリスト教化の前提となる「文明化」の手だてとして、アボリジナルの人々に対してクリケットが教授されたことがある。他の「文明化」の手だては不首尾に終わる中、クリケットは、アボリジナルの人々の間に広まっていた。その広がりを示す事例として、1868年、オーストラリアにとって最初のイギリス遠征を行ったのはアボリジナルの人々のチームであったことがあげられる。しかし、その後、人種主義の拡大とともに、アボリジナルの人々は排斥されることになる。Adair & Vamplew (1997), Booth & Tatz (2000), Cashman (1995), Vamplew & Stoddart (1994)、など参照。

(5)北からの脅威(帝国日本)の防波堤としての「白豪主義」としても唱えられた。

(6)巻末の参考文献、および、拙稿「進化するオーストラリアのスポーツ研究」一橋大学スポーツ科学研究室『一橋大学スポーツ研究』Vol.22、2003、を参照。

なお、「オーストラリアのスポーツとグローバリゼーション」というテーマにおいて、現在、メディアの世界戦略とスポーツの拡大、その流れの中に位置づけられるスポーツの“Americanization”（たとえば、バスケットボールなどの「新種目」の拡大）などが論点としてあげられるであろう。研究成果としては、メディアの展開を分析視点としたものとして、Rowe & Lawrence(1998)、Miller, Lawrence, McKay & Rowe(2001)、Rowe(2004)、など。

(7)NESB を移民そのものととらえることはできないが、実態として重なる部分は大きい。

(8)Alcorso et al (1992), Community networks and

institutions, Australia's Italians, Allen and Unwin (カーズルズ、ミラー(1996)、p.123 より重引。)

(9)この現象は、現在では、「フーリガン」としてとらえられているものといえよう。

(10)その他に、セルビアとクロアチアのように、「本国」での政治対立が投影していることも論究されている。

(11)オーギー・ルールズなど他のフットボール・コード (code) においても「暴力」の要素・行為が存在しているにもかかわらずほとんど取り上げることを行ないマスコミ報道の「偏り」にも、こうした意識が反映しているともとらえられる。また、この「偏り」には、「正確さ」が不十分でも「売れる」ためにセンセーショナルに書き立てるという「経営戦略」の側面もある。

(12)その一方で、エスニック・コミュニティの(次世代の)「担い手」の流動化の問題がある。

この問題は、たとえば、移民第2、第3世代のオーストラリアのスポーツの「主流(mainstream)」への接近という形で表れている。彼らにとって、社会上昇を果たす上で(あるいは、果たしたことで)、主流の Anglo-Australian スポーツ(クリケット、ラグビー、オーギー・ルールズ、ネット・ボール)の受容は不可欠となる。ここに、世代間の「文化的断絶」の問題が起こる。次世代への(文化の)継承を一つの目的として設立されたスポーツ(サッカー)クラブとしては皮肉な事態であるといえよう。

同時に、上記の注(6)でふれた Americanization の影響も大きい。

(13)関根(1994)、pp.209-225。および、関根(2000)など。

<参考文献>

【英語文献】

* Adair & Vamplew (1997), *Sport in Australian History*, Oxford University Press

*Booth & Tatz (2000), *One-Eyed: A View of Australian Sport*, Allen&Unwin

*Cashman (1995), *Paradise of Sport: The Rise*

of Organised Sport in Australia, Oxford University Press

* Hallinan & Krotee (1993), Conceptions of Nationalism and Citizenship among Non-Anglo-Celtic Soccer Clubs in an Australian City, *Journal of Sport & Social Issues* - Volume 17, Number 2

*Harrison (1979), What's in an ethnic name? Soccer clubs in Australia, *Canberra Anthology*, Vol.2, No.2

*Hughson (1992), Australian Soccer: 'Ethnic' or 'Aussie' - The Search for an Image, *Current Affairs Bulletin*, Vol.68, No.10

*Hughson (1998), Is the carnival over? Soccer support and hooliganism in Australia, in Rowe & Lawrence (ed.) (1998)

*McKay (1986), Leisure and Social Inequality in Australia, *The Australian & New Zealand Journal of Sociology*, Vol. 22, No. 3, Nov. 1986

*McKay (1991), *No Pain, No Gain: Sport and Australia Culture*, Sydney: Prentice Hall

* McKay, Hughson, Lawrence & Rowe (2000), Sport and Australian society, Najman, Western(ed.), *A Sociology of Australian Society(3rd edition)*, MACMILLIAN

* Miller, Lawrence, McKay & Rowe (2001), *Globalization and Sport: Playing the World*, SAGE Publications

* Mosely (1994), European Immigrants & Soccer Violence in New South Wales 1949-59, *Journal of Australian Studies*, No.40

* Mosely (1995), *Ethnic Involvement in Australian Soccer: A History 1950-1990*, ASC

*Mosely, Cashman, O'Hara & Weatherburn (ed.) (1997), *Sporting Immigrants*, ASC

*O'Hara (ed.) (1994), *Ethnicity and Soccer in Australia*, ASSH Studies in Sports History no.10

* Rowe & Lawrence (ed.) (1998), *Tourism, Leisure, Sport: Critical Perspectives*, Hodder

Education

- * Rowe (ed.) (2004), *Critical Readings: Sport, Culture and the Media*, Open University Press
- * Taylor & Toohe (1998), *Strategies to Improve Sport Participation of Females from Non-English Speaking Backgrounds*, ASC
- * Vamplew & Stoddart (1994), *Sport in Australia: a social history*, Cambridge: Cambridge University Press

【日本語文献（邦訳を含む）】

- * カースルズ、ミラー(1996)、『国際移民の時代』名古屋大学出版会。
- * 藤川隆男(1990)、『オーストラリア 歴史の旅』朝日新聞社。
- * 藤川隆男編(2004)、『オーストラリアの歴史ー多文化社会の歴史の可能性を探る』有斐閣。
- * アル・グラスビー(2002)、『寛容のレシピーオーストラリア風多文化主義を召し上がれ』NTT出版。
- * ガッサン・ハージ(2003)、『ホワイト・ネーションーネオ・ナショナリズム批判』平凡社。
- * 初瀬龍平編著(1996)、『エスニシティと多文化主義』、同文館。
- * 伊豫谷・酒井・T.M.=鈴木編(1998)、『グローバル化のなかのアジア』未来社。
- * 梶田、丹野、樋口(2005)『顔の见えない定住化』名古屋大学出版会。
- * 姜尚中、森巢博(2002)、『ナショナリズムの克服』集英社新書。
- * 町村敬志(1999)、『越境者たちのロスアンジェルス』平凡社。
- * マーチン(1987)、『オーストラリアの移民政策』勁草書房（原著：J.Martin(1978), *The Migrant Presence*, Allen & Unwin）。
- * 宮島喬・梶田孝道編(2002)、『マイノリティと社会構造』東京大学出版会。
- * 永田由利子(2002)『オーストラリア日系人強制収容の記録』高文研。
- * 中西直和(1999)、『オーストラリア移民文化論』

松籟社。

- * 西川長夫、渡辺公三、G.マコーマック編(1997)、『多文化主義・多言語主義の現在』人文書院。
- * NIRA・シティズンシップ研究会編著(2001)、『多文化社会の選択』日本経済評論社。
- * 関根政美(1989)、『マルチカルチュラル・オーストラリア』成文堂。
- * 関根政美(1994)、『エスニシティの政治社会学』名古屋大学出版会。
- * 関根政美(2000)、『多文化主義社会の到来』朝日新聞社。
- * 関根・鈴木・竹田・加賀爪・諏訪(1988)、『概説オーストラリア史』有斐閣。
- * シェリントン(1985)、『オーストラリアの移民』勁草書房（原著：G.Sherington (1980), *Australia's Immigrants*, Allen & Unwin）。
- * 杉本良夫(1991)、『オーストラリア 6000 日』岩波新書。
- * 杉本良夫(2000)、『オーストラリアー多文化社会の選択』岩波新書。
- * テッサ・モーリス=鈴木(2000)、『辺境から眺める』みすず書房。
- * 竹田いさみ(1991)、『移民・難民・援助の政治学』勁草書房。
- * 竹田いさみ、森健編(1998)、『オーストラリア入門』東京大学出版会。
- * 竹田いさみ(2000)、『物語 オーストラリアの歴史』中公新書。
- * 山田・北村・大津・藤川・柴田・国本(1998)、『近代ヨーロッパの探求① 移民』ミネルヴァ書房。
- * 吉浜精一郎(2001)、『オーストラリア多文化主義の軌跡 1992ー2000 年』ナカニシヤ出版。